鶴見大学紀要，第52号，第3部，39-46，2015.

情緒障害児短期治療施設における支援方法の検討

Study on how to help in the short-term treatment institution for emotionally disturbed children.

田家　英二*
Eiji TAYA

1. 目的

「情緒障害児短期治療施設」は、軽度の情緒障害児を短期間入所または通所させ、治療することを目的とした児童福祉法の施設である。施設数は38施設（2013年4月現在）、職員配置基準は児童福祉法に規定され、医師、心理療法担当職員、看護師、児童指導員、保育士、栄養士、調理師等が勤務している（表1参照）。

近年の「情緒障害児短期治療施設」は、被虐待児童が多いのが現状である。しかし、児童虐待の増加に対するニーズの高まりに対して、施設数は増えていない。また、施設で暮らす子どもの様子や支援内容は一般には知られていない。

保育士養成教育には「社会的養護内容」や「相談支援」という科目があるが、児童虐待についての教育は「児童相談所」や「児童養護施設」の説明の中で行われていることが多い。本来、虐待による「愛着障害」を抱える子どもの支援には、医師、心理療法士、児童指導員、保育士、学校教員の連携と協力が必要であり、子どもの心理治療を目的とするならば、より専門的支援方法が必要である。

本研究は、筆者が「情緒障害児短期治療施設」の利用者と支援者の様子が描かれた映像を視聴し、愛着障害を抱える子どもへの関わり方について考察することを目的とした。

2. 方法

「情緒障害児短期治療施設」の利用者と支援者の様子が描かれている映像、「うちは一人じゃない～虐待の傷　再生への500日～」（NHK 放送番組）を視聴し、ある女性（Aさん）の生活を場面ごとに細かく分析することを試みた。

Aさんは、6年間N施設で暮らした。その5年目から退所するまでの1年間（高校2年生から3年生の様子）に、どのような心理的変化が起こり、どのような支援が行われているのかを分析した。

各場面でのAさんの状況を理解するために、中谷茂一（聖学院大学大学院教授）の解説を参考に検討を進めた。筆者が考えた疑問や感想などを中谷氏に書面で伝え、さらに必要な資料をもとにした説明を受けながら各場面の解釈を進めていった（180分×3回）。

視聴したのは、N施設での子どもと支援者との関わりの姿であるが、その中で今回取り上げたのはAさんの1年間の生活である。日常でAさんの様子に変化のある場面を取り上げ、詳細に検討をする機会はとても貴重な経験であった。

この経験から映像による教育効果を改めて認識することが出来たので、今後の教育に生かせるよう内容を整理することにした。

表1. 情緒障害児短期治療施設人員基準（単位　人）　平成24（2012）年10月1日現在

職種等	最低基準	措置費基準	常勤換算従事者数
医師	配置（精神科又は小児科）	1	常勤 10 ／非常勤 10
セラピスト（心理療法職員）	10：1	同左	常勤 168 ／非常勤 7
児童指導員等	4.5：1	同左	常勤 383 ／非常勤 15
保育士			常勤 106 ／非常勤 6
保健師・助産師・看護師	配置	1	常勤 36 人／非常勤 1
栄養士	配置	定員 41 以上	
調理員等	配置（全部委託の場合を除く）	4	
施設長		1	
事務員		1	

常勤換算従事者数については、2014/2015年「国民福祉の動向」p.304～305を参考に作成。

＊〒230-8501　横浜市鶴見区鶴見2-1-3　鶴見大学短期大学部保育科
Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

3. 情緒障害児短期治療施設の概要

全国で38か所設置されている児童福祉施設。対象は、情緒に障害を持つ子どもで、概ね18歳までを対象としているが、現在は20歳まで措置延長ができる施設である。

情緒障害児短期治療施設には、医師、心理療法担当職員、児童指導員、保育士、看護師、個別対応職員、家庭支援専門相談員、栄養士及び調理員を置かなければならない。

医師については、精神科又は小児科の診療に相当の経験を有する者でなければならない。

心理療法担当職員の数は、おおむね児童10人につき1人以上。児童指導員及び保育士の総数は、おおむね児童4.5人につき1人以上となっている（表2参照）。

なお、施設に併設する小・中学校（学級）がある場合は、教員が配置される。

表2. 児童福祉施設運営基準

新	旧
第九章の五 情緒障害児短期治療施設 第七十五条 6 児童指導員及び保育士の総数は、通じておおむね児童四・五人につき一人以上とする。	第九章の五 情緒障害児短期治療施設 第七十五条 6 児童指導員及び保育士の総数は、通じておおむね児童五人につき一人以上とする。

人員配置基準引上げに伴う児童福祉施設設備運営基準の改正。

4. 各場面の説明と解釈

各場面の説明と相談支援の視点からの解釈（Aさんと職員Tさんの場面を中心に）

映像に描かれている場面	説明	解釈
1. オープニング 「包丁で刺された」経験を持つ少女や「ハイターを頭からかけられた」少年などが紹介される。 情緒障害児短期治療施設、N学園の説明と学校教育の場面（小・中学生は施設内で教育を受けている）などが紹介される。	2014年現在、情緒障害児短期治療施設（以下、情短施設と略す）は38箇所となっている。 各都道府県、全てに設置されているわけではない。	
2. Aさん（17歳女性）が画面に登場する場面 Aさんは、小さい子どもたちに対して、寝る前に絵本を読んでいる。 **Aさんが施設に来る前の状況を話す場面** （実父・義母から）「裸にされて外に出された」や「お風呂に顔をつけられた」経験などを話す。 さらに、施設入所に対しては、「結局、施設に入れられたんで、見捨てられたんだ」と話す。	Aさんは、医師から、「反応性愛着障害」という診断を受けている。 愛着とは、母親など特定の大人と築かれる強い信頼関係。 Aさんは、愛着障害により、人とどのように接したらよいかわからず、時々不適応行動を起こしてしまう。	**Aさんのやさしい姿** とても面倒見の良い、優しいお姉さんといった印象。絵本を読んでいる声は、明るく優しく聞こえる。 しかし、施設に入れられた事で親に見捨てられたと考えている様子が伺える。
3. Aさんが学校から自転車で帰ってくる場面 「学校に行くのはきつい」「学校はN学園とは違う場所」「頼れる人がいない」「一人になっちゃう」と話す。 番組スタッフが、「職員Tさんはどんな存在？」という質問をAさんにする。Aさんは少し迷った末に「おってほしい存在」「傍にいたらうざいけど離れたら会いたくなる」と話す。	職員T（女性）さんが、Aさんの横に座って、学校での様子を聴いている。	**Tさんの座る位置と聴き方** 横に座ることにより、過度の緊張を与えず、面接のような固い話し方ではなく、穏やかな話し方で接している。 Aさんは、職員Tさんに対して「おってほしい存在」と答える。Aさんの中に、Tさんへの信頼が芽生えている時期だと考えた。

4. Tさんとのもみ合いの場面 Aさんが（自分の部屋で）「痛い痛い」と声を荒げて、Tさんにつかみかかっている。 Aさんが、「もういやだ」「お前に何がわかる」と言って、子どものように大声で泣いている。	Aさんが暴力に至ったきっかけは、夕食時に職員Tさんが居間で他の子どもと楽しそうにしていたこと。 Aさんは、Tさんに対して素直に感情を伝えられない。 虐待を受けた子どもの多くは、大人への信頼感が育っていない。不安と恐怖感が暴力となって現れる。	**Tさんの暴力への対応** 職員Tさんは、Aさんの暴力を受けとめ、穏やかな対応で落ち着くのを待つ。 慌てず部屋の中に入ってから、後ろからAさんを抱いている。 Aさんの孤独感に寄り添うことで、Aさんが落ちつくまで、しっかり抱くことも必要。 Aさんが泣きやんだ後、Tさんはゆっくりと静かに話しかける。Tさんの声のトーンは低く、落ち着いている。Tさんは、自暴自棄になるAさんに対して、「とことん付き合う」こと、「逃げない」こと、「見ているよ」というメッセージを伝えている。
5. 診察の場面 Aさんは医師Mさんに対して「どこで発散すればいいかわからない」と話す。 医師Mさんは、Aさんに対して「赤ちゃん返り」をしていると伝える。 医師Mさんは、「やっていい範囲で抑えてほしい」と伝える。	医師Mさんは、Aさんが施設に入所した時からの主治医。 場所は、診察室ではあるが、終始Aさんの気持ちを考えて受け入れながら、諭すように、やっていい範囲を考えるように伝えている。	**愛着障害に対しての考え方** 医師Mさんから、「愛着障害というのは、大切な人のイメージが抱けないということ、親に代わる大人が瞼の奥に抱けないとならない。」とTさんに対して話しかけている。（瞼の母ならぬ）「瞼のT」のイメージを抱けるようにならないと・・・と話す。
6. Aさんが将来の夢を話す場面 この場面で、Aさんは将来、保育士になりたいというのがわかる。 いつも1人でいたから、児童相談所に保護された時、「保育士さんがトントンしてくれて安心できた」「安心できる保育士さんになりたい」と話す。	Aさんは、保育士になりたいと考えている。 そのためには、高校を卒業しなければならないことはわかっている。	**Aさんの夢を叶えるためには** 高校に通い、卒業するための支援が必要。
7. Aさんが、学校の備品を持ち帰ってきた場面 理由については、「話したくない」といって黙り込んでしまう。その後、「学校をやめたい」という。	学校からは、20日間の謹慎処分。 悪い事をして、大人の関心を引くという行為は、虐待を受けた児童の愛情欲求と考えることが出来る。	**社会的に問題を起こした時の対応** Tさんは、備品を持ち帰ってきた経緯について、一緒に考えようとした。 Tさんは、Aさんに対して無理に理由を聞き出そうとはせず、「気持ちをコントロールするすべを身につけてもらいたい」と話す。

8. 心理療法士とAさんTさんの3人の面接の場面 Tさんは、備品を持ち帰ってきた経緯について、一緒に考えたいと面接の目的を伝えている。 Aさんは、問題を起こした経緯について「わからん」「わかっていたらこんなことせん」と強い口調で言う。 心理療法士に向かって、「結局他人だから教える必要はない」それより、「もっと将来のことを考えたほうがいい」と怒りの感情を出す。 また、「どうにかしたいけど、どうしたらいいかわからん」と言い、Tさんの話も聞き入れず、部屋から出ていってしまう。	心理療法士は、用意した質問用紙を見ながら、1つ目の質問をする。しかし、Aさんは拒否的な態度を示す。	**気持ちを聴くことの難しさ** 質問項目が、1枚のシートにたくさん書かれていて、それを見たAさんは、なんで他人に自分の気持ちを話さなければならないのか、それがどんな意味を持つのか疑問に感じたのだろう。 Tさんは、Aさんの将来のことを考えるために、(面接を)「やろう」と促すが、Aさんは部屋を出ていってしまう。
9. 学校での面談の場面 AさんはTさんと高校を尋ねる。 Aさんは、「教室に入るのが怖い」ということを担任に伝えたいと考えていた。 Aさんは、保健室登校を認めてほしいと頼み、素直に謝った。	保健室登校をお願いするが、受け入れられず。	**Aさんの気持ちを大切にする** TさんはAさんを連れて学校に出向いて、話し合いの機会を持つ。 クラスに入れないAさんが学校に通う方法として、保健室登校をお願いするが、受け入れられず。 この時、Aさんが素直に謝ったこと対して、Tさんは「すごい」と言う。
10. 学校に行くことを促す場面 TさんはAさんに「とりあえず､学校に行ってみよう」と促す。 Aさんは、Tさんに対して強い口調で「登校できん」と答える。 Tさんは「行ってみて、教室に入れなければ、別室に行きたいと言ってみたらいい」と提案するが、Aさんは「うそはつけん」「無理やり学校に行っても何も変わらん」と言った後、「うちの気持ちになってみろ」と吐き捨てるように言う。 その後、部屋に引きこもるAさん。 Tさんは、部屋に食事を運んでいく。 「学校」と軽く声をかける。 Aさんは、布団から出ようとしない。 (ナレーション) 「逃げたい、でもどこにも行くところがない」とAさんは泣き続けた。	自分の思いが学校に伝わらず、自暴自棄になっている様子が伺える。 学校に行きたいのに行けない自分に対する怒りや不安、学校に対する怒りをTさんにぶつける。 乗り越えなければならない課題の大きさに混乱している。 他者に認められる体験がいかに大切であるかを感じさせる。	**Aさんの落ちついた対応** 落ち着いた口調でゆっくりと話しかける。 Aさんの強い口調に影響されることがない。 Tさんは、Aさんに対してしっかりと向き合って話しかけている。 TさんはAさんに対して、「ひとりじゃない」、一緒に考えて課題解決をしようという意図が感じられる。
11. Tさんの散歩の誘いに応じて公園で話している場面 (引きこもって3日目) ベンチでTさんはAさんの横に座り、おやつを食べながらリラックスした雰囲気で楽しそうに話している。	「あなたはひとりじゃない」とTさんは伝えたかった。	**リラックスすることも必要** Tさんは、あえて学校の話題には触れず､「子どもは何人ほしい」とか「自分は野球チームがつくれるくらい子どもがほしかったけど・・・手遅れか」などという気楽な話題で、Aさんの固くなった気持ちをほぐすように話しかける。

12. 再びTさんと副園長が学校へ出向いて、話し合う場面 Aさんが、辛く苦しい状況の中でも、学校に通いたいと思っていることを伝え続けた。	副園長とTさんが再び学校に行き、1時間を超える説明をする。 後日、学校から、保健室登校の許可が下りる。	**諦めない姿勢** Tさんや副園長の何とかしたいという気持ちが伝わる。
13. 学校に行く決断をする場面 AさんがTさんに手渡した手紙 「明日から学校に行きます」 「これからも一緒に乗り越えたいです」 「ありがとう」と書いてある手紙を渡す。 その後、部屋でTさんがAさんの頭をなでようとすると、Aさんが「さわるな、気やすくさわるな」と恥ずかしそうに言う。	Aさんが、初めて素直にTさんに気持ちを伝える事が出来た手紙。 乗り越えたという実感がAさんにもあったのだと思う。	**共に乗り越えたという思い** 学校の準備をするAさんの部屋でTさんは緊張する。 一緒に乗り越えてきたからこそ、自分のことのように登校に対して緊張するのだと思う。 Tさんからも手紙を読んだ後、「ありがとう」と言い返す。TさんのAさんに対する、深い共感がみられる。 Tさんとの愛着が深まるにつれ、Aさんの心が満たされていく。
14. 自転車に乗って学校に向かう場面 Aさんが、「なんだかんだ、応援してくれる人がいるので、出来るところまで頑張る」と話す。	Aさんが、自分を大切にしてくれる人がいるという実感が持てたから、頑張るという意識が芽生えたのだと思う。	**親が思うように** Aさんの登校を、Tさんが玄関で見送る。 苦しい思いを抱え、登校できなかった子どもを見送る。「行きましたね、すごい」「久しぶりにすがすがしいです」と話す。
15. 大みそかの夕食の場面 12月31日Aさんの部屋でTさんと2人でテレビを見ながら新年を迎える場面。	Aさんがテレビを見ながら歌っている。表情は明るく、落ち着いた表情。 不安は感じられなくなった。 (ナレーション) 2学期は、同級生の視線が怖くて一度も教室に入れず、このままでは卒業はできないと言われている。	**普通の暮らしが希望を生む** Aさんの部屋に、2人が横になって座り、TさんはAさんに「今年もよろしくお願いします」と年始のあいさつをする。 TさんからAさんに「今年はいい年になりそうだね、いい年にしよう」と話しかける。 気持ちが落ち着いていて、普通に暮らせることが将来に向かう意欲を生むのだと感じる。
16. 5年前施設を退所したKさんがお正月に来る場面 Kさんが、結婚して子ども(赤ちゃん)を連れてくる。Aさんに対して「保母さんになりたいんだよね」と話す。 Aさんは、赤ちゃんに対して、「ママ好き」と聞く。 Aさんが、赤ちゃんを抱っこして「やったー」と声をあげる。 Aさんは、「わーすげーと思った」「相当努力して幸せをつかんだと思う」「幸せになれるかわからんけど、なりたいと思っている」と話す。	5年前に退所したKさんの自立した姿が心の支えになる。 (ナレーション) 苦しみ暴れていたKさんをAさんは良く覚えている。 そのKさんが幸せをつかんでいる。	**もう1つの夢** Kさんと赤ちゃんを見て、幸せな家庭を築くという、将来の夢を思い描くことが出来た。 同じように、虐待を受け苦しんでいたKさんの姿が、希望に思えたのだと思う。 専門家の支援だけでなく、同じ悩みを持つ人たちの支えも、自立に大きな影響を与える。

17. 3学期直前診察の場面 医師Mさんが Aさんに「正念場が来ている」「学校に行けるかどうか・・・」と投げかけると「いや、行く」とAさんが力強く答えた。 Aさんは、「どう考えたかと言うと」「ここまできたもんで・・・」と明るく話す。	気持ちは表情に表れていた。 M医師も驚き、「今まで見たこともない表情」「このままいったらいいなーと」願うように言う。	**不安から希望へ「ひとりじゃない」という気持ち** 診察室で、はっきりと自分の意思を伝えた。 「学校に行く」という強い意志は、多くの人たちに支えられているからこそ、乗り越えられるという本人の自信の表れ。
18. 3学期の登校初日の場面 （自転車に乗って登校） （ナレーション） 「強い気持ちが芽生えていた」 「きつくなっても引きずらなくなってきた」 「Tさんの顔が浮かぶようになった」 「みんなのおかげだね」と言った。	自分の気持ちを表現することが苦手だったAさんが、Tさんの顔が目に浮かぶようになったと話した。まさに、M医師の求めていた、イメージとしての「瞼の母」が現実となった。	**「瞼の母」の誕生** 「瞼の母」となったTさん。Tさんは、Aさんと共に苦しみを乗り越えてきた。 Tさんが「すごい､超えたね」と言った。Tさんは、愛着関係が育ったことを実感したのだと思う。
19. 家族の写真を見る場面 （ナレーション） しかし、まだ大きな問題が残っている。自分を虐待した両親とどう付き合うか。 Aさんは「会いたくないと思ったことはあったけど、顔が見たくないわけではない」「親のことを考えると身がすくむ」と複雑な言い方をする。 さらに、Aさんは「めっちゃ仲良くなりたいとは思はないけど、きつい時に話が出来るようになったらいい」「普通の家族にはなりたい」と話す。	（ナレーション） 家族との関係修復という課題を抱えながらAさんは生きていかなければならない。	**Tさんだけでは支えられない** 家族との関係修復という課題は、簡単には解決しないであろう。 ここまでのTさんの支援は、Aさんを自立に向け、不安や恐怖感を取り除いてきた。 しかし、施設を退所した後は、Tさんが直接支援する事が出来なくなっていく。
20. 卒業式の場面 （本来の卒業式から3週間後） ひとりだけの卒業式。 （ナレーション） 短大への入学が決まり、保育士になるという夢が現実に近づいた。	出席単位不足を補うために補講に通い、卒業の日を迎える。	**責任を果たした充実感** Tさんは、Aさんの卒業式で「感動でした」と一言つぶやいた。
21. 施設での最後の夕食の場面 （ナレーション） Aさんは、1人ひとりに声をかけた。 突然、涙があふれた。 6年の思いが次々と思い浮かぶ。 （TV スタッフの質問） 「6年間一番良かったことは？」 Aさんは、「一番はここに来れたことかな、辛かった事より楽しかったことが多いし、感謝しとる、全部の事に対して、みんなに」と言う。	目標を達成するために、高校を卒業し、施設を退所することで、辛かったことや苦しかったことよりも、楽しかったことが思い出されている。	**感謝の気持ちが育っている** 多くの困難を、共に乗り越えてきたTさんとの関係の中で、施設に来たことを否定的でなく、肯定的に捉える事が出来るようになった。全てのことに感謝の気持ちが育っている。

22. 退所の日の場面 職員全員でお見送り。 アパートに引っ越し。 ＴさんはＡさんに、「やけにならんように、なりそうになったら、必ず電話して」と言う。(Ｔさんが帰った後の場面) 一冊のノート「応援帳」が置かれていた。1人暮らしの知恵が書かれている。体調管理や簡単な食事作りなどが書かれている。 施設職員全員のアイデアが、手作り応援帳になった。 Ａさんは泣きながら、一枚一枚めくって見ていく。 最後に書かれていたのは、Ｔさんの書いたメッセージ。 「人生は楽しい事ばかりではない」「人を裏切らず正直に生きてください」「そして、いつか幸せな家庭を築いてください」「あなたの幸せを心から祈っています」と書いてある。 Ａさんは、「がんばる」と一言つぶやく。	この施設では、退所の日に、多くの職員と子どもたち全員でお見送りをする。 施設の職員が作成した「応援帳」は、全て手書きで書かれている。既製品ではなく、多くの職員の気持ちがこもった応援帳だからこそＡさんの気持ちに響いていく。	**子どもを大切に思う気持ち** 退所していく子どもたちを支える１つの方法として「応援帳」が作成された。 職員からの応援メッセージ。 ＴさんからＡさんに対しての応援メッセージ。 「あなたはひとりではない」ということを伝える方法の1つが「応援帳」という形になっている。
「それから4カ月、Ａさんはアルバイトをしながら、夢をかなえるため大学は休んでいない」という字幕が流れる。		

5. 考察

虐待を受けた子どもの治療や支援方法を具体的に知る機会は少ない。今回、長期にわたる取材により描かれているＡさんの生活において、Ｔさんが「瞼の母」となっていく過程に注目する。

Ａさんが夢に向かって一歩を踏み出せたのは、Ａさんが本来持っている能力を生かすことが出来たからであるが、その能力を発揮するためには安心して頼れる人の存在が必要であった。

一般に、その人間が持っている主体性や能力、意欲、自信などを引き出す過程を「エンパワメント」という言葉で説明することがある。ＴさんのＡさんに対する関わり方は、常に落ち着いて話を聴き、深い共感を示し、辛い時には見放さず、励ますという態度で接している。愛着障害を抱えるＡさんを支援する過程で、Ｔさんが「瞼の母」となっていく。

Ａさんの暴力を抱きしめるように対応する場面では、Ｔさんは感情を表わさず、Ａさんが落ち着くのを待っている。自らの感情をコントロールし、Ａさんの怒りの感情に付き合っている。

Ａさんが「痛い痛い」と叫びながら、Ｔさんにつかみかかっている場面でのＴさんの対応は、痛みを感じさせるような対応ではない。なぜ、Ａさんはこのように大げさに「痛い痛い」と繰り返したのか考える必要がある。Ａさんは、親から虐待を受けている。その結果、実際は暴力を受けていないのに過敏に反応してしまうのではないだろうか。手を握る、体を触るという程度の身体接触なのに、過去の恐怖感から強い刺激と感じてしまうのかもしれない。

学校に行くことを促す場面で、Ａさんは「うそはつけん」という。虐待を受けた児童は、「うそ」をつかれて傷ついた経験を持っている。「うちの気持ちになってみろ」という言葉に、自分の気持ちは誰にも分かってもらえないという孤独感が感じられる。孤独感から自暴自棄になり、「学校に行っても何も変わらん」という気持ちになってしまうと考えた。

学校に行って高校の先生に、Ａさんが素直に謝ったこと対して、Ｔさんは「すごい」と言っているが、この時のＴさんの気持ちには深い共感があったと感じた。

その後、Ｔさんの静かで落ち着いた話し方がＡさんを冷静にし、自分を見つめて考えさせていくきっかけになっていると感じた。言葉の荒いＡさんに対して、冷静に話しかけることは容易ではない。そして、Ａさんの気持を大切にしながら、Ａさんが乗り越えなければならない課題である、学校に行くことを促す姿勢は崩さない。Ａさんの強い口調に影響されることもなく、しっかりと向き合って話しかけている。この対応の積み重ねが愛着関係を築いていく。

引きこもりのＡさんに対して、Ｔさんは部屋に食事を運んでいくが、指導的な言葉をかけることはしない。辛く苦しい気持ちを察しての対応だと考えられる。

公園のベンチに座って話をする場面では、あえて学校の話題は一切話さず、世間話で、辛く苦しい気持ちをほぐしていく。Ｔさんは、自暴自棄になるＡさんに対して、何気ない会話の中で、「私はあなたのことを大切に思っている」「なんでも話していい」ということを伝えているのだと感じ

た。引きこもりの状況に対しては、ただ見守るだけではなく、声をかけ、足を運び、自分で考える時間を与えるという対応が重要であると考えた。

6. まとめ

今回、映像を通して相談支援の方法を分析した。当初3回の視聴で検討をしたものの、細かなやり取りを再現するには、何度も繰り返し映像を見る必要があった。映像を教材とする場合には、細かな描写や登場する人の気持ちまで踏み込んで検討する必要がある。愛着障害を抱える子どもの支援方法を整理してわかったことは、ケースワークの視点が生かされていることである。「受容」や「統制された情緒的関与」「意図的な感情表出」などが、利用者が本来持っている力を引き出すうえで重要な要素であり、適切な支援を継続していくことで愛着関係が育っていくことがわかった。

参考文献

厚生労働統計協会『国民福祉の動向　2014/2015年』2014.
橋本好市、宮田徹編著『保育と社会福祉』2012、みらい.
橋本好市、直島正樹編著『保育実践に求められるソーシャルワーク』2012、ミネルヴァ書房